

資本：形而上作用としての (2)

橋 爪 大三郎

(受付 昭和58年10月18日)

前稿においては、記号学的な形式観に定礎しながら、独自の行為分析を経て、身体と事物の特異な統合としての資本体の概念に到達した。

本稿(2)は、それにひきつづき、まず、貨幣、とりわけ資本制的貨幣の存在様態を、意味作用と権力との工学的な仕掛けの展開系列において、明らかにする。それは、預金通貨による信用創造を末端とする貨幣の位階秩序、端的には喩の構造である。ついで、諸行為に君臨する資本の形而上作用を考察しよう。この作用は、近時、消費生活を変貌させ、広告の言説を通じて、資本制の〈外〉を抹消する内閉へ向かって進んでいる。

目次：行為分析へ

行為秩序の展開

資本体 (以上前号)

喩としての貨幣

資本の形而上作用

文献 (以上本号)

喩としての貨幣

【14】 貨幣形態の歴史的動態は、現物性から乖離しようとする道筋として描かれる。資本制的貨幣にいたって、乖離はその極に達する。

かって資本制批判を敢行したマルクシズムは、その固有の実体観のなかで、貨幣を現物 (具体的には、^{きん}金) と相等視した。しかし、貨幣はもともと、実体であるよりは、市場における意味作用を、そう、ただちに権力の

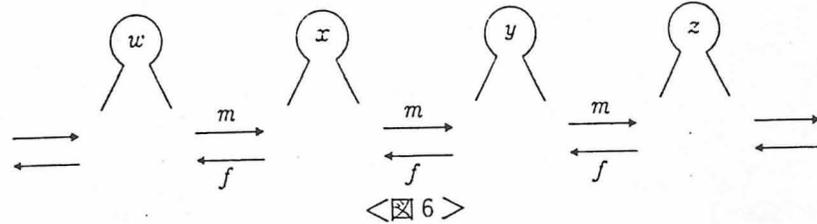
微細な作用を感知させるような、交換の推移性^{*33}をこそ、担ってきたのである。

資本制的貨幣は、単なる交換の仲介手段たるにとどまらず、信用創造を通じて資本体の運行を司るべく、端的に喩の構造として、すなわち、より

m * n 第[m]節の、通し番号 n の注。

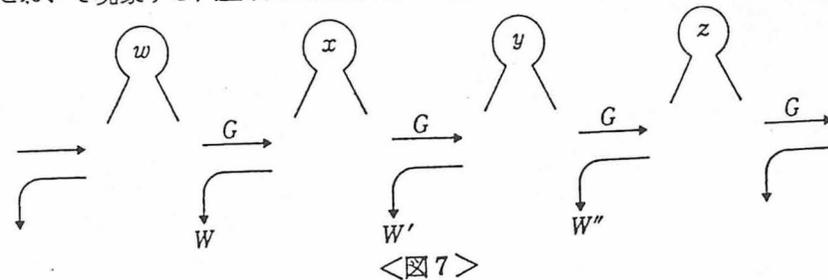
14 * 33 推移性 (transitivity) とは、2項関係 (binary relation) に課しうる公準の一種であって、 xoy かつ $yoz \rightarrow xoz$ のように表現できるものをいう。

交換の推移性とは、それぞれの交換が、他の交換を前提した帰結とする、双方向的な波及の網の上にあることをいう。男財 (m)/女財 (f) の儀礼的交換の場合 (<図6>), たとえば x から y への m の譲渡は、w からの受領の帰結であり、z への



譲渡の前提である。しかしこれは、取引の前後関係をいみしない。女財 f に関しては、上述の向きは逆転している。要するに各取引は、暗黙のうちに相互を共時的に参照しあうことで、自らを可能としている。個々の取引の成立は、全域に張られる権力の作用の、線素 (line element) に相当しよう。

貨幣の場合 (<図7>) にも事情は似通っている。各人は取入を通じて入要とする個別の商品実体を獲得するが、それが「スムーズ」にすすむために、実体的な需要と結びつかない交換手段が、抽象的な作用素 (operator) として介在する。x が W' を受領するのは入要だからだが、y がひきかえに G を受領するのは、次の取引でそれが受領されるどの予料にもとづく。こうして各取引は相互に参照しあい、G を一般的な受領可能性として成立させる。貨幣 (G) は、こうして、一般的な支払手段 (それ以上の支払方法のない最終的な現物性) としての自らを現わす。貨幣の行使は、任意の取引において現象する、全域的な権力作用の効果である。



直説的な貨幣機能から派生する、意味作用と権力との工学的な仕掛けとして、たち現われる^{*34}。

社会形象としての貨幣に着目し、その直説態から派生的な諸形態へと展開する系列を追うとしよう。

【15】 直説の機能に即して、貨幣に簡明な概念規定を与えよう：

(1) 貨幣は、市場において一般的な購買力として働く作用素である。

市場^{*35}は、交換すべき商品を携えた人々の集まりであって、そこでは交換比率 (のみ) が社会規範化されている (価格)。人々が入要する各商品は、その限りで一般的な享受可能性を帯びる。交換において、商品は互いに他の商品を購入するのだが、そこでもしある商品が一般的な受領可能性をも帯びるのなら、その商品は、一般的な購買力^{*36}として現象しよう。

14 * 34 「喩」というとき、ひとは R. Barthes のコノテーションの概念をまず念頭にうかべよう。

Sa		Sé	Sa: signifiant Sé: signifié
Sa	Sé		

Barthes の議論には、批判の余地も多いが、ここで '喩' の名のもとにとりだしたいのは、単純な指示作用 (Sa-Sé) の重層によって複合的な意味作用を導出する論理の骨組みである。

流通手段としての貨幣には、現物 (現実的なもの) の観念がついてまわる。この観念は、現に貨幣が流通するという事態と増幅しあう関係にあるが、この流通は、貨幣の現物性を稀釈させる流通の拡大の契機と、貨幣の信頼性=現物性へたちかえる契機との拮抗のうへで、かろうじて実現されてゆくようなものだ。

最単純の場合に想定すべき端的な現物性を、直説の貨幣機能と名づければ、貨幣機能は一般に、それに関説し、含意する関係にたつ。貨幣におけるこの現物性の欠乏は、推移性 (<14 * 33>) によって充填されつつけるのであり、かくして貨幣は、意味作用と権力との工学的な仕掛けであるのだ。

15 * 35 貨幣の権能は、市場の成立と表裏一体の関係にある。市場があつて然るのちに、取引上の工夫として貨幣が発明される、のではない。没人称性をともなる空間の全域的な(再)編成である市場と、普遍的な作用素としての貨幣の析出とは、同一の事態の両側である。

15 * 36 一般的購買力とは、いつでも誰からでも任意の商品をそれとひき換えに入手 (次ページへ続く)

これは商品貨幣である。

しかし一般的な購買力たりうるものは、一般的な享受可能性を有する商品に限らない。慣習にもとづく交換財でも、規約による制定貨幣でも、交換の推移性を保証するものならよいのである。貨幣を商品の下位範疇とは規定できない。

貨幣は、ひとびとがそれを貨幣と認定し、受容することを離れては、貨幣たりえない。それゆえ、(1)の規定は、貨幣がつぎの単純な意味作用とともにあることを、要請する：

(2) 貨幣は、特定種の物たることによって、一般的な購買力としての自らを指示する、という意味作用をもつ。

商品は差異の体系であり、おのおのはその享受の具体的な可能性の種別に応じて意味をもつ。これに対して、購買力である貨幣は、非貨幣である商品との関係においてのみ貨幣であるという抽象性をもつ。貨幣を組成する物たる具体性は、たしかに(2)の指示作用の基礎であるが、それは決して享受の具体性へ至らず、その通用(=推移性)を担保する権力の抽象性へと向かうのである^{*37}。

(前ページより続く)

しうることをいう。こうした一般的な作用の出現により、空間は平坦化されて、場所論的な特異性を剥奪される。

貨幣の機能は、現象的には、価値の尺度、交換の媒体、支払手段、価値の貯蔵手段としてたしかに把えられよう。だが、そのいずれか、またはそれらの組みあわせによって、貨幣を概念規定するには難がある。むしろそれら機能を、(1)の規定から導出すべきなのだ。

15*37 貨幣は、支払い(payment)という執行的(performative)な行為のなかで行使される。この行為は、身体的外形的な動作に還元できない内容をもつ、すなわち、貨幣を<呈示し><手渡す>と同時にその所有主が変更されるのであり、それが商品の権利関係の変更と対合して、売買という行為が成立する。

呈示の際、目にされるのは、貨幣の大まかな外形(外見)であるが、支払いによって相手の手に渡るべきは、その内実(一般的購買力)である。この外形と内実とは、特

(次ページへ続く)

【16】行使される貨幣がどれだけの購買力として通用するかは、競合的に同時に行使されんとする貨幣の総量に対する比率に依存して定まる。このように購買力は量的であるので、それを単純に指示する関係にたつ貨幣のもっとも純化した形態は、秤量貨幣である。

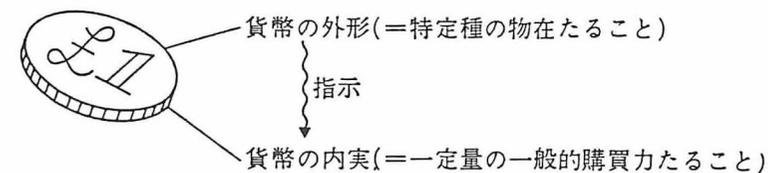
秤量貨幣では、秤量される純分が、かかる購買力を意味するものだが、この純分は、人為によって措定できない自然の物在である。かくしてこの貨幣は、非制定的な貨幣のこれ以上遡りえない形——現物貨幣——とみなしうる。すべての貨幣形態はここから派生したのであって、われわれのしる貨幣で、こうした現物性から厳密ないみで絶縁しえたものは未だ存在しない。

鑄造貨幣(鑄貨)^{*38}は、秤量金属貨幣のような現物貨幣が現存する市場において、より複合的な指示作用を有する。すなわち：

(3) 鑄貨は、その名目量において地金(秤量貨幣の純分)の一定量を指示し、そのことから派生的に、自らを一般的な購買力としてあらわす。

(前ページより続く)

定の物たる種であるしかない貨幣の物在性において統一されているが、そこには、半ば自己言及的な、次のような意味作用が認められるはずである：



<図8>

16*38 鑄貨とは、たんに秤量貨幣を鑄造・成型したものをいうのではなく、刻印などその形状が、通用のための名目量をもつものをいう。秤量は、純分の所在を都度確認する操作である。この操作は、頻回かつ誤差・端数を含むゆえに繁雑であり、実用性を減殺する。これに対して、鑄貨は、鑄造の時点において純度と重量とが特定されており、秤量が完了した秤量貨幣である。いっぽう、硬貨、すなわち単に形態上鑄造されただけであって、はじめから純分を持たない補助貨幣を、鑄貨にかぞえないのもちろんのことである。

鑄貨の理想は、その名目量（形式）と純分（内容）とが一致することであり、そのとき秤量の手数は省かれる。しかしこの一致は、蓋然的なものにすぎず、たえず脅かされる^{*39}。あまっさえ、悪鑄や偽金の介在によりこの不一致が拡げられるならば、ついには名目量は、その貨幣としての信用を失うにいたるであろう。グレシャムの法則は、このような形式と内容との乖離が生じるころでは、つねに妥当する。

【17】 鑄貨以上に注目すべき工夫は、預かり金証書や手形による貨幣形態であろう^{*40}。便宜上、これらすべてを一括して、書記貨幣 (written money) と呼んでおく。書記貨幣は、つぎの複合的な意味作用を有する：

- (4) 書記貨幣は、文言によって、支払いに充当すべき貨幣の所在を指示し、そのことから派生的に、自らを一般的な購買力としてあらわす。

書記貨幣の指示作用は、それが貨幣に言及する文言をしるした書面 (note) であることに、根拠をもつ。この結果、書記貨幣は、鑄貨をしのぐ抽象性を獲得する。鑄貨は、いまここにある外形のもとに隠れた純分を指示することしかできないが、書記貨幣は、いまここに不在する遠隔なる貨幣を指示しうるのである。

16*39 鑄貨の指示作用は、自分自身へと向かうものであるから、确实そうに思われよう。しかし、鑄貨の流通をささえる名目の効力は、結局のところ、純分（そこに所在するはずの現物性）への信頼にもとづいているため、①鑄貨の損耗、②鑄貨の変造、③鑄貨の改鑄（悪鑄）、④偽鑄貨（偽金）などによって、容易にその一致を脅かされてしまう。こうして鑄貨は、不斷に秤量貨幣へとさし戻されるのである。

17*40 支払手段としての為替手形や預り金証書の類は、古代・中世の交易商人がしばしば用いたものである。これらは、盗難などの危険を防ぐため、現物であることを辞め、(空間的な) 遠隔に所在する(現物) 貨幣(の支払い) を指示する文言でおきかえたものである。貸付手段としての約束手形も、時間的な遠隔に所在する貨幣に言及し、その支払いを指示する文言であるという点で、同様に機能する。

貨幣(ないし現物) が遠隔なるがゆえに、書記貨幣はここにある。ゆえにひとは、貨幣を遠隔においたままで、この文言をしるした書面をめぐって支払行為を実行することができるのである。

書記貨幣は、遠隔なる貨幣に确实に言及するものであるとき、信頼しうるものとなる。しかし書記貨幣はいかにしても、その信頼性の保証をその書面中に書きこむことはできない^{*41}。従って書記貨幣は、その指示作用から自立して、みずから現物貨幣の位格を獲得することはできないのである。

書記貨幣は、言語の形で定在しているから、秤量を必要とするような貨幣の具体性を脱している。しかしそのため、かえって書記貨幣は、蓋然的にしかそれが指示する貨幣と繋がらなくなる。それは、さしあたりその文言のうちで、それが指示する貨幣と繋がっているだけだ。だからたとえば、発語の状況が適切性の条件をみたさなかったり(詐欺)、支払いを指定する執行文の内容が事後に実現しなかったり(不渡り)、ということが容易に生じうる。それゆえ書記貨幣が、一般的購買力として十分な通用性をうるためには、信用制度の発達が伴わなければならなかった。

【18】 市場の成立と同時に、利殖への志向が蔓延する^{*42}。利殖の手段としての貸付けをめぐる市場(貨幣市場)では、貸付け行為への反対給付たる利子が、利殖をもたらず。

貸付けとは、異時点にわたる交換の設定である。貸付けに対しては返済が予定される以上、貸し手と借り手との間に信頼を欠くことはできない。しかし貸借の両当事者が、いくら返済が确实であると信じて、他の第三者までがそう考えるとは限らない。その場合、貸し手は、返済を受けるまで何も持っていないと見なされてしまう。ここでは信頼は、信用 (credit) に転化しない。

これに対して、一般に貸付けが、貸し手と借り手との間の具体的な人間

17*41 手行文句は、文言に「手形」ないし「この手形は……」という表現を含み、かくして自己言及性を具えた執行文となっている。この事実は、手形振出しという言語行為を書面のうえで自存なものとし、規定(4)にいう指示の作用に物的定在のかたちを与えている。

18*42 単純な利殖の形態とは、①貸付け $G-G'$ 、②投機 $G-W-G'$ 、③交易 $G-W-G'$ 、の3つである。但し後2者は、範式の示すように、似通ったものである。

関係から区別され、債権-債務関係として社会的に確定されると、貸付けは第三者に対しても客観的ないみをもちはじめ。貸付けは、財貨（貸付け手段）と債権とを交換する行為であり、貸し手は貸付けを介して債権を所有する。市場において適切な貸付け手段は貨幣であり、すべての貸付けは貨幣の貸付けに帰着させうる。こうして、債権-債務関係を設定し言表する手形の類は、(4)に規定したような書記貨幣の性格を帯びはじめる。

どの時点の市場にも、貨幣の貸し手と借り手とが現われて、貨幣の市場が形成される。そこでは、貨幣が債権を（債務が貨幣を）購買する。利率は、貸付けの条件を構成する。

貸付けが、高利貸しや講のような、貨幣の単なる移転によってしかまかなわれない場合には、貨幣の供給にはそれ相応の限度がある。いちじるしい貨幣の不足はむしろ常態であり、借り手は高金利に苦しむことになる^{*43}。実際、産業社会の揺籃期は、そのようであった。貴金属をひねりだそうという錬金術のあらゆる試みは失敗したが、かわって、無から貨幣を創り出すという魔法によって資本制経済を支えることになったものこそ、信用創造のメカニズムである^{*44}。

信用貨幣は、各人が自分に対する債権（それゆえ自分の債務）を設定するところに生じる。そこで各人が獲得する貨幣は、それまでどこにも存在しなかった(!)ものである^{*45}。これはまことに驚くべき工夫であるので、

18*43 成算のない事業を試みようとする借り手を選別して排除できない、見境のない貸し手は、危険負担を含めた、高利を課さざるをえなくなる。高利は、新規の投資を、著しく阻害する。18世紀初頭、絶対王制下のフランスで企てられた有名なJohn Lawのシステムは、債務に苦しんだ王室とペテン師の共謀によるものと言えようが、それはたしかに貨幣の不足を解消し、一時的な好況をうんだのである（↓赤羽[1978]）。

18*44 貨幣が当面不足するのであれば、他処から調達できるならそれで解決できるようにも信ぜられよう。だがこれが解決でありうるのは、ある当事者にとってのみである。この対処自体が、別の場所に新たな不足をつくり出してしまふ。現金の貸付けは、貨幣と貨幣の不在とを双方向的に移転する操作にすぎない。

18*45 信用創造がなされる以前においては、債権-債務関係は、いかに当事者が返債を確実視しているとしても、それを無条件に第三者に対する支払いに充てることはできない。債権-債務関係は、多角的に相殺できるだけなのである。

慎重な検討を要するであろう。

【19】 貨幣の不足に対処するひとつの典型的な仕方は、兌換紙幣の発行であった^{*46}。

(5) 兌換紙幣は、準備にあてる貨幣との交換可能性を含意することによって、自らを一般的な購買力としてあらわす。

このような紙幣が、市中で購買力として行使されはじめるならば、貨幣量は、本位貨幣のみの場合と比較して、顕著に増加する。

兌換紙幣は、貨幣とのひきかえを指示する書面である点で、さきの預かり金証書や手形などの書記貨幣と区別がないように見える。しかし、兌換紙幣と準備された貨幣との対応は、暗黙の、幾分は想像上のものにすぎず、決して1対1に特定できはしない。兌換紙幣の発行は通常、通貨の膨張をとまらう。というより、多くの場合、それを目的とする。だから、発券銀行がめいめい兌換銀行券を発行する場合には、しばしば容易に信用の瓦解がおとずれた^{*47}。

兌換紙幣は、なおも本位貨幣ないし現物の観念に緊縛されており、信用供与の手段としても不完全である。

【20】 もうひとつのさらに重要な仕方は、銀行の信用供与にもとづく信用創造である。このようにしてつくりだされる貨幣は、（要求払）預金

19*46 兌換紙幣の発行は、政府もしくはその監督下にある中央銀行による場合と、民間の個別の発券銀行による場合と、大別して2通りある。これら銀行は、本位貨幣（たとえば金）の準備や各種の資産を裏付けに、その額をはるかに上回る兌換紙幣を発行した。

19*47 兌換券の発行が、単に流通手段の不足を補うという必要の範囲をこえ、専ら銀行による信用供与（無担保貸付け）の手段となる場合には、容易に貸付けの無規範状態が生じ、不良企業が大量に輩出する。この結末は、取付けと兌換停止、さらには発券銀行の倒産・兌換券の廃貨であろうが、これとともに、不良企業のみならず兌換券を所持するすべての経済主体が一様に打撃を被らねばならない。このように、兌換券の発行と信用供与とを結びつけるのは、はなはだ稚拙な方策である。

(いわゆる銀行預金)の形態をとる*48。

(6) 預金は、銀行の口座に預けおいてある貨幣の引出し可能性を含意することによって、自らを一般的な購買力としてあらわす。

預金は、預金者の手許における端的な貨幣の不在である。不在である貨幣は、銀行の手許にあることになっている*49。従って、預金を支払い手段として用いるには、現に存在しない貨幣に言及する文言をしるした書面、すなわち小切手をもってすることになる。

(7) 小切手は、預金の振替を指示する文言として定在することにより、自らを預金貨幣と等置させる意味作用をもつ。

こうして預金は、現物との引照をまぬがれる*50。

20*48 要求払預金とは、銀行のいわゆる当座預金であり、支払いに充てるため現金を窓口で預けおいてあるという状態を、まさにいみする。(普通預金は、これに準ずる性格もあるが、小切手を振出して支払いに充てることはできない。)これに対して、定期性の預金は、預金者の銀行に対する債権であって、現金ないし支払手段ではない。

20*49 実際に預金者がもちこんだ現金と同額の預金口座が開設されると限られるなら、預金は現実だとみられよう。しかし、当座預金は貸付けのための擦制としても用いられるのであって、実在しない預け入れにみあった(実在する現金にはみあわない)預金の開設が、銀行の手でなされる。ここで肝腎なことは、現実の預金と擬制としての預金とが、口座勘定のなかでは区別されることなく並存させられていることである。こうしてそれと気付かれぬうちに、貨幣が私的に創造され供給されている。

20*50 小切手は手形と似た面があり、法制上は有価証券として類同の扱いを受けてもいる。しかし両者は‘現物’と引きあてられる仕方が異なるので、区別さるべきだろう。

手形は、債券であるのだから、期日がくれば相手からの取立てによって、現金(たとえば預金)へと変換される。手形は、その外に現物貨幣をもつしかなく、その限りでは自らは貨幣でない。現金への変換が実現しなくても(不渡り)、それは別の形の債務に変換されるのであって、その債務を弁済できれば市場復帰の余地がある。

これに対して小切手は、ただちに口座から引き落され、あるいは他の小切手と相殺されるのであって、それ以上の現物貨幣に変換されるものではない。小切手はそれ自身が支払い手段であり、その外に溯及を許さない現物性である。小切手が落ちなければ、ただちに支払い能力がないものとされ、経済主体とはみなされなくなってしまう。

(商業)銀行が行なう手形割引は、流通性の限られた手形(債権)を、より受領性の高い預金へと変換する手続きである。近代銀行は、この手形割引を通じて預金貨幣を創出し、資本制経済が要求する資源請求権の迅速な移転を、人知れず実現してしまいうことができるのだ。

【21】 兌換紙幣と、とりわけ預金通貨とを、喩としての貨幣とよぼう*51。なぜなら両者はともに、より直示的につかまれる貨幣を間接に含意する関係にたつことにおいて、自ら貨幣たることをえているからである。これら信用にもとづく貨幣の発明は、空間の(古典)資本制的な再編の、原動力であった。

喩の関係は本来不安定なものであるので、信用を制御し、発券と貸出しとを「秩序ある」ものにしようとする工夫が要請される。たとえば預金準備、公定歩合を課する中央銀行制度が、それである。このようにして、金本位制的な貨幣の位階秩序が成立してくる。そのもとでは、末端の預金通貨は兌換券と、兌換券は本位貨幣たる金と、含意関係により結ばれてある。この喩的な位階秩序のゆえに、空間の全域にわたり信用の調節が作動する。これが、資本制空間の貨幣的な特徴である。

金本制の本位貨幣たる金の量は、社会外変数であり、上限がある。従って、金本位制下で信用を安定させようとする努力は、早晩に喩を陳腐化させ、貨幣の供給を硬直させてしまうしかない。この皮肉な帰結のゆえに、金は、貨幣の位階秩序の外に押しやられねばならなくなった。このことによって、喩の構造を守るためである*52。

21*51 兌換紙幣を換喩、預金通貨を直喩とみなすことができようか。なぜなら兌換券は、たとえば金との引きかえ証券であることにおいて、金にかかわるものであるのに対し、預金通貨は、窓口で現金と同様の効力をもって扱われるため、金のようなものとなっているからである。

これに対して、不換紙幣は、端的に貨幣(ないし金)そのものとして提示されているのだから、隠喩としての仕掛けをもつものとみてよいかもしれない。

21*52 金本位制は、通貨のシステムを、国家権力の意に服さない現物性の観念のもとにつなぎとめておくものである。当然、この制度は、Keynes 的な需要管理と財政政策の思想になじまない。そのため各国は、兌換券を廃し管理通貨(不換紙幣)制度へと移行をとげた。こうして一国内における現金とは、不換紙幣に異ならなくなる。

兌換紙幣の貨幣としての働きは、それが実際兌換されることには結局のところ依存していない。兌換とは、(5)に示す含意関係を成立させるための工夫にほかならないから。それゆえ、貨幣量を確保するのであれば、不換紙幣もまた目的に適っている。むしろ、当局が発券量を任意に調整できる管理通貨制度の方が、好都合でさえある。

(8) 不換紙幣は、公権力によって措定され、単純な指示作用へと回帰した、純粹に形式的な貨幣である。

不換券は、権力によって創られた現物貨幣であり、貨幣を社会内変数へとおきかえることを狙ったものだ。しかし、この企図は成就できない。総体としての貨幣メカニズムは、個別の公権力によって引き裂かれながら、日々に新たな矛盾を(再)生産しつつある^{*53}。

管理通貨(不換紙幣)への移行は、預金通貨の資本制的な作動を妨げない。このメカニズムは、個別の銀行(の支店網)の知悉できる範囲に局在する具体的な社会関係や情報を、全域にわたり通用する一般的な権力=貨

21*53 公権力が創りだした貨幣の現物性は、虚構であるから、公権力が実効的にはたらく領域内で通用するにすぎない。それゆえ、管理通貨体制は、個別経済圏での国民所得政策を可能とするけれども、その一方で、各経済圏相互間の資源の移転を、より露骨な権力問題として現出させることになった。

貨幣の国際秩序は、各国(人類の各部分集合)の資源請求権を相互に査定するメカニズムとして、理解しなければならない。貿易を決済するには、各国通貨の相対的な購買力の水準(為替相場)を決定する為替市場が存在し、また、外国の持ちあう外貨による決済の方式が定まっている必要がある。各国通貨の購買力は、各国経済の実態(生産性)で測られる。そのいみで、国際通貨市場は、依然として現物性の市場であり、世界的な信用創造を行ないえないでいる。資本制の大運動が世界を席捲し、空間を資本制的に再編したことの帰結が、国家による空間の大分割と軍事的対立であるのは、究極にはこのような理由による。

国際通貨体制は、当面、かつての金・ドル本位制をはなれて、IMFの特別引出権(SDR)を強化する方向にすすみつつある。しかるに世界通貨は、求めて遠い。人類は、当面解消されそうにないこみいった意志の不整合を抱えており、世界通貨を措定するにたるような世界権力(人類的な合意)がまだ存在すべくもないからである。

幣へと変換する装置なのである^{*54}。資本体があまさずこうした装置の端末に接続されることにより、空間全域にわたる資本体の一樣で合理的な配置と編成が、すなわち資本制空間の集合的秩序の実現が、可能となる^{*55}。

資本の形而上作用

【22】 行為連鎖の断片を下屬させつつ、それらの交替のうえに自らを維持する資本体が、そこに充当されてある各身体に対して及ぼす効果を、資本の形而上作用と言おう^{*56}。資本体は、その技術的前提である思念の自己一貫性(4【6】)を、集合的に調達しなければならない。資本体がかって共同体の習俗に埋もれていた間は、それが自体的な形而上学としてふるまい、齊一な諸身体を供給したので問題は視えなかった。これに対して、資本制下の資本体は、共同社会を出離し、習俗の拘束を脱した遊離身体に対し、より積極的な形而上作用を発揮するように迫られる。

諸身体は、財貨の一般的な享受可能性に伝染し、それを身にまとうことで、習俗から切りだされ、遊離身体として挙動しはじめる。かかる身体に

21*54 銀行は、手形割引きの操作(4【20】)を通じて、問題となっている資本体の事業の有望性、採算など、関係者のみが知りうる具体的な諸要因を、空間全域で一樣な基準から評定し、それにふさわしい資源請求権を分配するのである。

21*55 完全競争市場の仮定のひとつに、マレアビリティ(malleability)、すなわち、任意の生産財を任意に用途変更できるという条件があったが、このいかにも非現実的なおもむきのある仮定がいみしたのは、資本体が喩としての貨幣を通じて演出され、相互に結ばれており、時に応じてその構成素へと解体しては再び別の資本体の運動へと組みこまれていく、という資本制に固有の運動のことであった。

22*56 ^{メタフィジク}形而上という名称は、^{フィジカル}身体の行為秩序に対して資本体が^{メタ}超越的審級をなす事実にもとづく。

形而上学は、身体に対してかような専制をふるう実体的な体系である。すなわち、形而上学であれば、それがとらえる身体に対して形而上作用を及ぼすのは、むしろ当然であろう。これに対して、資本は、それ自身少しも実体的な形而上学でないにもかかわらず、諸身体に対して強力な形而上作用(たとえば、規律・訓練)を及ぼしているようにみえる。しかもそれは、いささかも救済のための仕組みではない——ここから、20世紀をおおう深い憂愁と無規範が滲みだしてくる。

対してこそ、主体化が施される。習俗を外れもはや齊一でない身体は、近代という絶対空間から一様に主体としての規定を受けとり、正則化される。資本体の発揮する形而上作用は、心的自己把持をひきよせ、いまや市場を浮遊する主体=身体を文脈自由 (context free) に配しはじめる^{*57}。

M. Weber は、資本制的な倫理の淵源を、カルヴァニズムの救済の教義にみてとった。予定説に帰依する身体は、たしかに、地上の蓄財と利潤追求へと、容易に加速されてゆく、ただしそれには、当初の神学=実体的形而上学からの‘脱臼’^{*58}をいちど経ることが、必須であるが。

22*57 Foucault は、主体とは所与でなく生産されるものであり、空間をその時代にふさわしく特性づける制度、ある歴史的な形象であることを洞察した。然らば、この主体あるいは内面の制度は、どのように開始されたのか? Foucault はこの鍵を、いったんは〈告白〉という(多分に正統的)パフォーマンスのなかにみとめ、さらに霊肉分離の根源を求めて、キリスト教の性的身体セクシュアリティのなかを溯行しながら、いくぶん踏み迷っているとみえる。わたしはそういう努力とは別に、内面の制度の源泉を、イエスの愛の教説、なかんづく律法に關説する喩的な断層にみとめた(橋爪[1982a])。

ところで、主体の観念がキリスト教と密接に関わるのだとすると、それを、たとえば日本にもちこむことの当否が問題となろう。わたしの見解をのべれば、まず、主体という場合、あらゆる社会にみとめられる普遍的な事実をいうのか、ある社会の特殊な制度をいうのか、区別するのが第一歩であろう。日本には、主体の制度が欠けてきたが、資本制を可能にするその等価物がみつかるはずである。

制度としての主体化の進行につれ、各人は身体エントスの主人であることになりはじめる。各自身体とその挙動は、主体の自由意思に服属するのであるから、各自身体とその挙動が、増殖する資本体の末端につぎつぎ整合的に配列されてゆくためには、資本体はこれら自由意思の整合性を獲得することが必要にして十分である。資本体は、契約を通じて、必要な行為連鎖(の断片)に見合った心的自己把持を調達することができる。

22*58 Weber 宗教社会学の帰結によると、現世内禁欲をもたらすのはピューリタニズム(カルヴァニズム)なのだが、これは教義からのストレートな帰結ではない。それをもたらすのは、偶有的ともみえる外生的な要因を織りこみつつ生じる変質である。そのいみで、これは‘脱臼’とでも表現すべきなのだ。

こうした要因を考えてみよう。ひとつは、予定説の解釈の変更である。予定説はもと、神の救済の予定を人間は認識できない、と説く。《だれが選ばれた「聖徒」であるか分からない》以上、《エリートだけの教会をつくることは原理的にできない》(大木

(次ページへ続く)

神学の時代(前近代)から近代をわかつものは、宗教的寛容である。この形而上学の括弧入れは、資本制近代への空間的地じりを帰結する。こののち信仰や実体的形而上学や哲学体系は、かつての共同社会から剥落した主体=身体に各私的に内属するものとなる^{*59}。そして、それとの反射的な

(前ページより続く) これは長老派プレスビテリアンの行き方であるが、会衆派コングレガショナリストの人々は、予定が自分らには〈わかる〉と考え、自分らを「見ゆる聖徒」と規定する。教会はかかる「信者の集まり」であり、自発的な契約(教会契約)によって人為的に結成される。

会衆派の理想は、新大陸の植民社会などで典型的に実現された。社会それ自身が、教会を複製した、神権政体である。だがこの契約説そのままの小宇宙は、2方向から変容を迫られる。すなわち、一方では、回心体験(聖徒たるの確信)をえられない聖徒の子孫をいかに遇すべきか、という時間的な問題。もう一方では、異なる信条にたつ宗派が空間的に共在する領域の政治的統合を、いかに実現すべきか、という空間的問題。前者は、契約の書きかえ(半途契約)、さらには暗黙の再改訂(見ゆる蓄財による業の契約)を通じて、資本制的な主体性への転換を準備し、後者は、宗教的寛容にもとづく政治的手続きの自立、すなわち民主制デモクラシーにいたる道筋を準備する。

22*59 宗教的寛容は、信仰にとどまらず、実体的形而上学一般の括弧入れと規定すべきものである。

通常理解によれば、これは次のようである——ひとびとは、各自、己れの神・形而上学・価値を信奉している。しかし、こと世俗的な活動に際しては、それらは留保され、内面にとどめられて、外形的な行動との結びつきが断念されねばならない、さもなくば、この世は血ぬられた神々の闘争の場となるであろう。

この通念はしかし、逆転することも可能なのだ。実体的な形而上学や哲学は、テキストの形で現存する。だがそれらをうみだす活動は、可視的・外形的な社会空間のなかにあるとは信じられないようになって、ついに各人の‘内面’へと割りあてられてしまったのだ、と。Wittgenstein は、歯痛のような「私的感覚」を例にあげ、ひとびとの行為の言語ゲーム論的状况が、歯痛なるものを各人の内面に各私的に配当する様相を描きださんとした。内面の制度も、おそらく同様の構成をそなえている。

宗教的寛容に後続する近代の絶対空間は、各自の行為が配列されてある可視的な空間であって、そのなかでそれら行為や言表は、各自の内面への遡及を誘導するような仕方ではなっている。しかしその遡及は、必ず内面に達する手前で途絶することになっている。つまり、留保すべきは、いかなるかたちでも現前することのない、内面の実体性のほうなのだ。

資本制空間において、諸身体を事実とらえるのは、資本の形而上作用のみである。この空間には、有効な他のいかなる形而上学も、存在しない。各自の内面に形而上学が存しうるとの信憑は、各自がこの作用の外部にあるあいだ、消費する主体として資本体を外部から支えるために、むしろ有効なのである。

関係において、身体の外形であるかぎりの行為連鎖（の断片）は、自由に資本体の下属させうるものとなった（L13*31）。

【23】 マルクシズムは、資本制下における資本体の作動を、主体の隷属の物語として解説する*60。遊離身体（プロレタリア）を‘解放’する（資本制空間の外に連れ出す）ためには、そのかりそめの主人＝資本をまず、脱主体化しなければならない——こうした解説を教条に掲げ、革命の主体（党）が、資本体ならびに資本制的国家を征圧し、資本制の解除をはかる*61。資本体は利潤動機を剥奪され、逐一その拳動を全体計画のなかで特定される。党は当面、空間の特権的な主体、絶対の命令者としてふるまう。こうした経済の計画的一元化は、マルクシズムによる資本制批判から当然帰結する実践形態にほかならない*62。

23*60 ここでマルクシズムが解説の鍵としている階級概念規定は、さしあたっては資本制の経済的諸関係のなかで与えられるが、歴史認識のなかではその域を越え、古代や中世へと延長されている。奴隷制や農奴制は、明らかに主と僕（Herr und Knecht）の主題に適わしいが、それが逆に、今度は資本制のなかにひきこまれてくる。

隷属の主題は、反射的に、解放の課題をうむ。それは人類を階級関係一般から解きなつことである。そこで救済されるのは‘人間’の観念であるが、それは、近代の絶対空間がその空間の一樣性（uniformity）とともに産出する効果にほかならない。この円環が、マルクシズムを、近代の内閉のなかにとらわれたただか1個の形而上学の位置におとしめるよう、はたらいている。

23*61 党（教条）に主導される軍、という構図は、啓示宗教に固有のものであり、古くは十字軍を想いかべられよう。ただ、各自の自発性（主体性）にもとづいて、教会と相似な組織原則をもつ軍を編成する、という発想は、クロムウェルの鉄騎隊やニューモデルアミー新模範軍に始まる。この種の軍は、救済と解放のための軍であるが、20世紀後半の軍事的な大分割の様相が深刻であるのは、双方がこの伝統に立ち、軍事的対立が形而上学的対立を孕むからである。

23*62 計画化は、資源配分の効率のゆえに選ばれるのではなく、諸々の資本の脱主体化のために推進される。

計画的一元化は、資本家たちの無秩序にかわって、諸々の資本体のあいだの範列関係（分業系）に、ある意思的な関係をもちこむことである。だが、どの資本体にも上位する計画主体の指令によって、すべての資本体が秩序づけられるなら、それは全ての生産活動が可視的な単一の資本体に統合されてしまったのと同様である。

共産主義は、喪われた共同社会の記憶をたどる。資本制の勃興が共同社会を解体し遊離身体を輩出しつづける間、党は全体意思を体现しつづける可能性があるが、これは束の間にすぎぬ*63。しかも計画的一元化は、非効率と不自由とを随伴する。そこで必ず、計画的一元化の妥当性、さらには党と革命の正統性への疑義が湧きおころう*64。体制へのこの疑義が晴れぬ間、その下で主体＝身体の被る抑圧は監禁の相さえ帯びる。なぜなら空間は、資本制と異なり、実体的形而上学によって堅固に形態化されているからである。

マルクシズムの批判は、資本体の内部構成に手をつけるものではなかった。それは、行為の形式性への視線を欠いている。そのため、革命のもたらした計画的一元化の体制は、資本制空間の外には樹立されず、資本制の一亜種たるにすぎないものとなり、純然たる資本との優劣関係のなかにおかれてしまう*65。実際そこで労働する主体＝身体は、資本制下におけると類同の現実を体験しよう。この形而上学的な叛逆のもたらした亜空間は、

23*63 Marx の外れた予言として、窮乏化論や階級対立激化論にもまして重大なのは、革命の勃発する地域である。彼の教説が受容され社会勢力として登場できるのは、資本制が日常的に君臨する空間であるよりは、崩壊しつつある共同社会の痛苦が人々に訴求するような空間であった。これは、資本制を主体の隷属の物語とする解説の正当性を疑わせるに十分である。

Marx の予言が成就しなかったため、‘歴史’という観念の内実はいまや空座となってしまう。

23*64 私の考えでは、一般に正統性には、組織上の正統性と教義上の正統性の2種別がある（L橋爪[1983a]）。党に関して言えば、前者は、誰もしくはどの組織がMarxの権威を正しく継承したかであるが、ここで考えたいのは、それとは別で、後者、すなわち、資本体の総体を脱主体化し非効率と不自由とをうみだすことの正しさをどう根拠づけるか、である。私のみるところ、今日もはやいかなるマルクシズムの党もこのような正統性を主張できるとは考えられない。

24*65 マルクシズムは、資本制を離脱し、共産主義社会へ移行するという政治プログラムをもつ。しかし、どういう根拠により資本制を離脱できることになるのかという社会革命の内実や、共産主義社会の具体的な規定などといった肝腎な点は、これまでいちども明晰に語られたことがなかった。

資本制としての不完全さゆえに、やがて純然たる資本制へと復帰するはずである*66。

【24】 マルクシズムの資本制批判は、所有論に依拠するものであった。所有の概念は、財の帰属主体を問題とするにすぎない、範疇的なものであり、形式的ではない。そこでわれわれは、行為を追究する形式的な観点から、資本制という事態をさらに追ってみよう。

資本制空間は、可視的な形而上学の実像を結ばない(↓22*59)。多くの資本体は、競いあい依存しあって、互いが互いを相対化する。そして、総体としての資本体の作動(経済活動)は、各私的な価値の表明(消費支出)による集合的な義認を与えられる*67。A. Smith はここに恩寵の予定調和を直観したが、たしかに意思論からこれを見ると、最善の結果であると言ってよい*68。ただしこの結論が有意味であるのは、各私的な価値が^{ポジタイ}実定的に定立できるとする前提にたった限りであることに、注意しよう*69。

24*66 かつての収斂理論においては、両体制は、同じ未来へ到達するための2本のルートととらえられていた。しかし私の見解では、20世紀に現われた、共産主義を志向する試みとは、資本制に匹敵するもう一本の途なのではない。それは、歴史に踏み迷った行きどまりの迷路である。

24*67 ここで集合的な義認にみだてられている、経済活動の水準を決定する最終需要を、貨幣投票 (money voting) とたとえることができる。

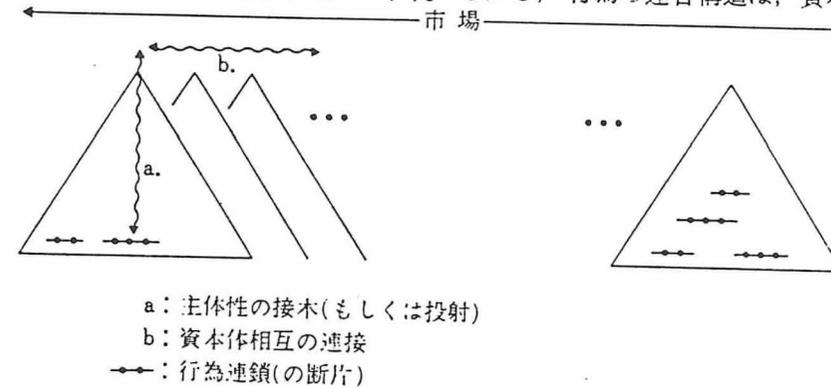
24*68 Edgeworth は、市場の帰結を社会契約説の文脈で解釈しようと試み、市場均衡を各経済主体の最適化行動の終着点とみなす理解を提示した。この試行は、R. J. Aumann にいたって、Walras 的な競売買市場の均衡と von Neumann 的な交換ゲームのコアとが(いくつかのシムブルな条件をおけばその極限において)一致するという、ほとんど美的な洗練を思わせる形で定式化された。“個人主義的な社会観はつねに価格メカニズムを通じて表現できる”ことを明白に論証した結果を、落合仁司は「厚生経済学の基本定理」とよんでいる。

24*69 Edgeworth-Koopmans-Aumann 流の議論は、各人の有する^{ポジテイヴイテ}選好体系を前提して疑わない。それに対して、Foucault-内田隆三流の議論は、主体(の実定性)が、社会空間におけるその制度的な近傍から代補される、というロジックを示した。この角度から、落合([1983]ほか)の規範理解についても、再解釈を加えることができる。彼は、個体主義的な理論はその背後にかならず何らかの制度的な諸前提を隠している、と指摘する。交換の円滑な運行は、その反対物である紛争が予め解決を与えられた場合に、ようやくえられるのである。すなわちこれは、選好体系にもとづく諸個人の主体的な活動が分溜されるのは、空間の全域にわたる規範ないし社会制度の効果においてであり、こうした制度が各個人に各私的な価値を配当している、という事態を含意しよう。

資本体に組みこまれる行為連鎖(の断片)は、事前にその形式を特定されない。アモルフな可能性のまま時間を限って移譲されるのである。行為の具体相は、事後的に、資本体が課す機械系としての要請により定まる。この要請をつらぬく必要性の全貌は、個々の行為者の理解を超えていよう*70。

こうして移譲された行為連鎖は、資本体の形而上作用へ向かって吸いとられた空虚となる*71。

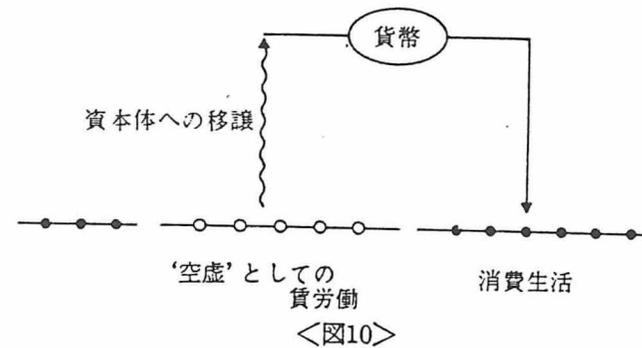
24*70 労働者は、彼の行為連鎖(の断片)を、資本体が発揮する集合的な主体性へと観念的に結びつけるかもしれない(a.)。しかし、行為の連合構造は、資本体の相



<図9>

互的な連接のなかで、個々の資本体の発揮する主体性を相^{キャンセル}殺し無化する方向にはたらく。これは、さきの方向と噛みあわず、直交する(b.)。a.→b.へと意味づけを延長することは不可能であり、それは、市場に与えられる集合的な義認ないし消費の哲学のなかで、蓋然的に回収されるほかはない。

24*71 賃労働は、それ以外の部分の行為連鎖から延長のしようのない断絶に、両端を挟まれている。行為連鎖に穿たれたこの空虚は、むしろそれにとまなう空虚によって了解される。賃労働のいみは、彼の消費生活において、事後的に(再)発見されていく。



この空虚を埋めもどすべき消費生活において、事物（消費財）と行為とは、資本体の域外で、各私的価値を体现すべく配列される。生産／消費という概念的な区分は、資本制下でこのように対立する行為連鎖のふたつの区分のことである。しかし、消費社会論も指摘するように、今日、消費の様式自体が資本体によって生産されはじめている*72。効用は、資本制の作動を義認する実体的な価値の審級ではなくなった*73。資本制は、浪費と蕩尽の祭式と一脈通づる外見をもった、当初と別様のある内閉的な装置へと変貌をとげつつある。

【25】 資本制下での労働は、言表の術なき沈黙の淵にしずむ端的な事実としての行為である。この沈黙を課すのは、資本の形而上作用なのだが、これを対抗的な形而上学によってはねのける試みは、計画的一元化と消費の逼塞を結果した*74。消費社会は、ちょうどこの体制と裏腹だが、そこで消費の過剰は、消費の実態に先回りする広告の過剰とともにある。

広告とは、実像としての形而上学を結びえぬ空間における、資本体の饒

24*72 諸個人の消費が資本体総体の挙動に義認を与えうるかどうかは、消費の実態である生活様式が、資本体の自己増殖的な運動から独立であるか否かにかかっている。消費生活の行為連鎖は、なるほど、特定の資本体の下属するものではない。しかし、「便利さ」の累進をうまわる消費生活の異様な形態変貌が生じはじめるとき、それはもはや資本体総体の〈外〉ではなくなった。この変貌のなかでは、実用／非実用の対比が溶解し、賃労働者＝消費者が、消費生活を彼独自の事物と行為の統合の形式において保ちえなくなっている。その行為連鎖の諸形態は、製品とともに資本体のなかで設計され、製品のひとつひとつが権力の作用素としてはたらきはじめる。

24*73 Baudrillard の消費社会論のねらいは、私の理解によると、効用という実定的な概念にもとづく近代経済学理論の実証性を、解除することにあつた。しかし、効用概念を100%払拭するという目標は、彼のやり方では果たすことができないと思われる。

25*74 消費の逼塞は、計画のまずさからくるのではなく、計画化そのものから帰結する。

25*75 資本制への迫真をはかるこの試みは、必ずしも批判的な接近ではない。変貌しつつある資本制を、ただ単に記述的に解明するという作業のほうが、いまこの時点でははるかに根柢的であると信じられる。

舌である。資本体は、内へ向かつては賃労働に対して沈黙を強い、外へ向かつては広告の言説をふりまく。広告の過剰は、消費生活の変貌と効用の解体との重要な兆候である。

広告の特質は、(i)無償で、それゆえ過剰な言説であり、(ii)製品に付着し、製品とともに消費され新陳代謝し、(iii)資本体の競合のはざままで競争的であり、したがって総体として宇宙論的な渦巻きを造出する、という点にもとめられよう。それは、意味ありげでありながら、意味の解除を志向しており、各私的な価値の実現の過程を資本体の増殖傾向と不可分に連接させようとはかる。資本体の総体が繰りだすこの言説は、その宇宙論的な渦巻きの発揮する神話作用を通じて、資本制下における形而上学の不在を充填し、賃労働と消費生活との範疇区分を抹消するようにはたらきながら、資本制の〈外〉をついに不可視のものとするのである。

生産から消費にまでまたがる、かかる資本体の専制は、不断に変化してやまない運動である資本制を、その端初たる古典近代と十分背馳する地点にまで運んできた。しかるにその動向を追尾する理論的作業は、いま緒についたばかりである。行為秩序の形式分析をすすめ、資本制の変貌になお記号学的接近を試みるなら、われわれは遠からず、資本制の成就と瓦解の描像をいちどきにとらえることとなるに相違ない*75。

*本稿の【14】～【21】節は、旧稿（橋爪[1979]）からの抜粋を含み、文面にも共通する部分がありますから、ひとことおことわりいたしておきます。

文 献

- 赤羽 裕 1978 『アンシャン・レジーム論序説——18世紀フランスの経済と社会——』、みすず書房。
- 橋爪大三郎 1975 「親族・家族・社会システム——人類学的交換理論の論理とその拡張——」、『家族研究年報』1:12—24。
- 1976 「吸血鬼：コミュニケーションへの衝迫」、(未発表)。
- 1977 「加工品の眩暈」、(未発表)。

- 1978 a 「“記号空間論”の基本視座」, 『ソシオロゴス』2: 1—11.
 ———— 1978 b 「経済の人間化へ」, (未発表).
 ———— 1979 「喩としての貨幣(抄)」, 『ソシオロゴス』3: 116—121.
 ———— 1979/1980 「〈言語〉派行為論の基本構図(1)~(3)」, 『止揚』30: 20—29; 32: 21—32; 33: 30—41.
 ———— 1981 a 「法の記号論へ」, 『記号学研究』1: 95—106.
 ———— 1981 b 「太平洋の交換経済」, (未発表).
 ———— 1981 c 「売春のどこがわるい」, 『女性の社会問題研究報告』4: 24—53.
 ———— 1982 a 「性愛論」, (未発表).
 ———— 1982 b 「形而上作用としての資本」, (未発表).
 ———— 1983 a 「近代政治学の根本問題」, 『ソシオロゴス』7: 120—128.
 ———— 1983 b 「記号の王国: 〈日本〉の権力分析」, (日本記号学会第3回大会シンポジウム配布原稿).
 ———— 1984 “NIPPON: The Realm of Signs”, *Degrés* (forthcoming).
 宮台 真司 1983 「行為理論の再構成——規範論的視角——」, (東京大学大学院社会学研究科修士論文).
 落合 仁司 1983 「法と経済の社会理論」, 長尾龍一・田中成明 (eds.) 『実定法の基礎理論』(現代法哲学第3巻): 313—349, 東京大学出版会.
 大木 英夫 1968 『ビューリタン——近代化の精神構造——』, 中央公論社.
 内田 隆三 1980 「〈構造主義〉以後の社会学的課題」, 『思想』676: 48—70.
 亘 明志 1979 「行為の記号論へ」, 『ソシオロゴス』3: 122—133.
 ———— 1980 「M. フーコーの権力分析と社会学的課題」, 『社会学評論』31—1(121): 60—76.
 ———— 1981 「消費社会のレトリック——広告の言語行為と記号の消費——」, 『思想』682: 82—102.
 ———— 1982 「権力のシミュレーション——ボードリヤールのフーコー批判をめぐって——」, 『広島修大論集』23—2(42): 193—218.

文献挙示は、『ソシオロゴス』誌編集委員会制定の〈ソシオロゴス方式〉によりました。なお書式は、同委員会(〒113 東京都文京区本郷7丁目3-1 東京大学文学部社会学研究室気付)に請求すれば、誰でも実費で入手できます。

Summary

Capital: as a Meta-physical Operation (2)

Daisaburo Hashizume

The first half of the paper, based on a formalistic view of semiology, developed action-analysis originally, and reached the concept of 'Capital-Body' as a special syntagm over bodies and things.

The second half, its sequel, explains the states of existence of money (esp. capitalistic money) in its developing series of engineering device of signification and power. It is a monetary hierarchy with credit creation at their lower reaches, namely, a metaphorical structure. Then the meta-physical operation of capital over bodies is to be discussed. It modified the consumers' lives lately, and is now advancing towards the final autism which erases the «outside» of capitalism.